



ある日のランチ



ナカノリエ

「この間、彼の友達に紹介されたの。

懐かしい人が何人かいるからって、約束通り電話がきて、行ったのね。

そしたら、一人おばさんがいたの、太ったおばさん。

彼はかっこいいじゃない、そんな人の友達にあんな太ったおばさんがいるなんてびっくりした。」

「でも、随分年上だもん、そういう人もいるんじゃない？」

「やだー、なんであんな人がいるのかさっぱりわからなかった。

せめて性格がいいとかさ、そういう人ならともかく、性格も悪いの。」

「ふうん。」

彼女はともかく熱心にその納得のいかない出来事について話していた。

「なんで、あんな豚みたいに太ったおばさんが彼の懐かしい人なんだろう。」

「まあ、懐かしいっていうくらいだから、

その人もずっと前からおばさんってことでもないだろうしい、
スタイルは、わからないけど。」

「いや、おばさんは、ゼータイにずっと前からおばさんだよ、そういう人っているもの。
それに私たちはおばさんになんかならないでしょう。」

「それは、心がけ次第かも、わからないよ」

「そんなことないよ、私たちはならない。」

「そうかなあ」

きっと、とびきり嫌なことでも言われたんだろう。

こんな風に話すのは珍しい。

そして、彼にも、あの人何なのって、ぶつけられないくらい、面白くなかったんだろうな。

「もう、彼のことが、ちょっとだけわからなくなっちゃった！」

相当お怒りのご様子だ。

まあ、そんなものかも知れない。

私だって彼に紹介された友達がちょっと気に入らない人なら引かかるかも。

ただ、今日の私は、延々続くおしゃべりをそんな風に思いながら、聞き流していた。

どんなに普段は頼りになる友達でも、今日は話が別なのだ。

今日は本当は言いたいことがあって彼女を誘ったのだ。

年下の彼氏と思いがけず、結婚することになり、その報告をするつもりだった。

出会って程なく、同棲が始まった。

結婚願望なんてなかったし、プロポーズされた時には、正直、若干重いような気がして引かなくもなかった。

反面、びっくりしながら嬉しい気持ちもなかったとは言えない。

でも、うちは親が離婚しているし、結婚なんて相手の親も出てくるし、やっていけるかなあと相談したかったのだ。

ところが、今日はとてもそんな様子じゃない。

今日どころか、しばらくはそんな雰囲気じゃないだろう。

何しろ彼女は結婚したいのだけれど、どうも彼氏が煮え切らないらしい。

そこにそんな友達を紹介されて機嫌は悪いし、

結婚願望のなかった私に結婚話が持ち上がったなんて聞いたら、

いくら普段は頼りになる彼女でも、冷静なアドバイスは聞けなさそうだ。

まあ、彼女に話さなくても、なんとなく、気持ちは固まっている。

結婚してもいいかな、彼となら。

彼は幾つか年下だけれど、背伸びもないし、僻んだところもない。

ただただ穏やかで、毎晩私のところへ帰ってくる。

私だって仕事をしているから、彼の世話を焼くわけでもない。

けれど、自然と、家事はできる人ができることをやって、

それでなんとなく回っている。

「籍だけ入れるんでもいい？」

「結婚指輪は？」

「そうだね。じゃあ、指輪は買いに行こうね。」

「一度親にも会ってくれる？」

「うーん、どうしよう。私、そういうのがちょっと。」

「無理しなくてもいいよ、報告だけでもいいし。」

「そう、ありがとう。」

「こちらこそ、ありがとう。」

その晩は手をつないで寝た。

そんな風にその晩のことを反芻していても、彼女のおしゃべりは続いていた。

もう、ランチタイムが終わる。

「そろそろ行こっか？」

「え？あ、うん。でね、』

まだまだ止みそうもない。

私はおばさんでも構わない。

まさか、結婚するとは。

週末、結婚指輪を買いに行って、その足で籍を入れる。

穏やかな日々を重ねて、私は、おばさんになろう。

だって、歳は争うものじゃなくて、重ねるものだもの。

大きな決断な話のように思えた結婚がとても自然な流れで訪れた。

そんな風におばさんになろう。

そんなのも素敵じゃない。

午後の風に新しい時間が始まった。